

審査の結果の要旨

氏名 中山 利恵

日本の木造建築における「洗い」の歴史的研究 —木肌処理技術からみた建築の経年に対する美意識の変遷—

日本の伝統的木造建築は、経年による腐食や破損、変色、汚損に対して様々な技法が培われてきている。その中に、経年した木肌の変色や汚れを洗う行為、風食や経年劣化した木肌の凹凸を削る行為、また、旧材と新材の調和を図り古色をつける行為などの処理技術が存在する。本論は、この木肌の処理技術の「洗い」とその原初的行為である「木肌削り出し」に着目し、国宝・重要文化財建造物の修理工事報告書等の文献史料を丁寧に読み込み、さらに、存命する数少ない洗い職人にインタビューをすることによって、その歴史的経緯の解明を試み、それらの分析を通して建築の経年に対する美意識の変遷に検討を加えた、意欲的な論文である。

本論文は、序章と本論 4 章、そして、終章の 6 章からなり、末尾に付論がつけられている。序章では、研究の背景と目的を述べ、第 1 章では「洗い」の原点である「木肌削り出し」について述べ、第 2 章では伊勢神宮の遷宮記録に見られる「洗清」の祭儀を分析する。第 3 章では、近世作事文書にみる「洗い」について検討し、第 4 章で聞き取りによる近現代の「洗い」に眼を向けた上、最後の終章で全体のまとめと結論を述べる。付論は、道具から見た「洗い」技術の分析である。

序章では、背景、目的、「洗い」の定義と概要、既往の研究と文献によるレビューが記される。とりわけ、本研究の動機となった、世界遺産条約「奈良ドキュメント」(1994)が提唱する「素材のオーセンティシティ」が、日本の伝統的な木肌処理技術—「洗い」や「木肌削り出し」やそこから生まれてきた美意識を衰退させるのではないかとの危惧は、注目に値する。

第 1 章では、国宝・重要文化財修理工事報告書と近世史料に記録された木肌削り出しについて事例を発掘し、その目的や技術を検証した。見え隠れ部分では、ほとんど削り出しが行われていない。これらの事例から、建築の修理・改造・古材を用いた新築・移築にもなって、この行為がなされ、建物を新しく見せたいと言う要求からこの技法が採用されたことを明らかにした。

第 2 章では、伊勢神宮の遷宮に見られる、主に中世から近世にかけての「洗清」の変遷を、『神宮遷宮記』を分析することによって、「洗い」の早期の例とその意味を解明した。その結果、伊勢神宮の式年遷宮における「洗清」は、竣工した正殿を「洗い清める」という呪術的・儀式的側面と、「水で洗い拭き上げる」ことで遷宮までの古びや汚れを取り除く実利的側面の二つの意味があり、現在の「洗い」はその双方を原型とみなしてよいことを検証した。

第 3 章では、近世の作事文書に見られる「洗い」の記録を考察することによって、伊勢神宮の式年遷宮に見られる中世の原型的な「洗清」と現在の「洗い」との間をつなぐ事例の発掘と分析をおこなっている。元禄期の法隆寺文書によって、当時の奈良に「洗い屋」がいたことを確認した。近世初期の奈良・京都での大規模修理を経た近世中期では、小規模な普請が主体となり、それが灰汁などの新たな材料と「洗い屋」という新たな職種によってまかなわれていたことも明らかにした。

第 4 章では、現代の洗い職人への聞き取りと近現代に行われた洗いの事例を通して、洗いの起源が灰汁洗いの年代、すなわち、慶長 6(1601)年にまで遡ることができる可能性を提示した。また、苛性ソーダが洗いに導入された 1880 年代に、洗いは効率的になされるようになって戦後を迎え、さらにその利用に拍車をかけた。しかし、一方で文化財修理では、表面の荒れを作り出すことや「素材のオーセンシティブティ」が尊重されたことによって、苛性ソーダによる洗いは次第になされなくなっていることを示した。

終章では、結論として、「削りの系譜」「清めの系譜」の二つの系譜が有していた建築再生の意図を、「汚れ落としの系譜」により見出された灰汁洗い技術で実現する行為として、洗いが成立してきたことを述べる。そして、経年した建築の最適の美の実現させる技術のひとつである「洗い」の誕生、変遷と、それに対する美意識の存在との相関関係を明らかにした。

その研究方法、分析内容、結果は、博士論文の水準に達している。さらなる精進とこのテーマの今後の発展を期待し、本論文を博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。